

## 趣味は異炉偉炉から

### ●プロローグ

戦後の復興が漸く軌道に乗り始めた頃、私（K少年）は東京の下町に生を受けた。木造の長屋が軒を連ね、あちこちから機械の音が聞こえてくる町工場の多い土地柄であった。路地から路地は殆ど未舗装で埃ぼかった。

K少年の父は祖父から継いで2代目の煉瓦屋で、主にボイラー関係の築炉に携わり、軽三輪に煉瓦を積んでは現場を飛び回っていた。

祖父は、炉はもちろん、煉瓦で下水道や建物まで幅広く仕事をやっていたらしい。（今でも、古い家を壊すと煉瓦の基礎が出てくる事がある）

元々祖父は山梨の煉瓦工場で働いていたが、親戚を頼って上京し、煉瓦工事屋になったそうだ。ルーツを辿ると（叔父の話）、戦国時代 武田信玄に仕えていた豪族？の一派だったらしい。その祖先が窯や火に係わる仕事をしていたかは定かでないが……



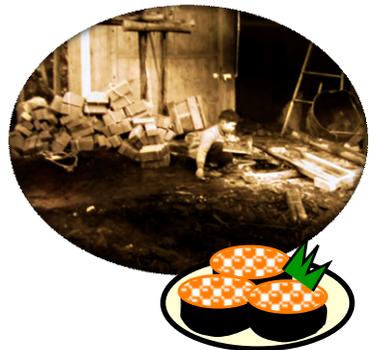
### ●K少年と父

年末年始、ゴールデンウィーク、旧盆、連休と父の仕事は忙しく、友達たちの休みと正反対だったが、K少年はいつの間にか慣れっ子になっていた。夏休みは決まって、母の実家（栃木県）にほぼ一か月疎開？していた。そのそばに田舎では珍しく眼鏡のおじさんがやっている小さな模型屋があり、零戦やら、紫電改やら戦闘機のプラモデル作りを教えてもらった。しかし、父が全く遊んでくれなかった訳ではない。友達たちとサイクルが違っただけで、手が空くとキャッチボールもしてくれたし、近くにできた東京スタジアム（今はないが...）へボーリングや冬特設のアイススケートにも連れていってくれた。

当時、破れ太鼓と異名を取るFさんを始め、個性のある職人さんたちが在籍していたが、夜間とか休日突然のトラブル時、K少年は父親に次の決め台詞で小学校低学年の時から、現場に駆り出された。

『帰りに大好物のイクラをご馳走するから』……

小さなマンホールから煉瓦やモルタルを入れてあげるだけであったが、手元がいなくては出入りが大変である。



あの頃のボイラーは炉内はもとより、外周と言うか外壁は赤煉瓦でとても迫力があつた。一回材料を入れると、しばらく間があるので近くに転がっている物で遊びながらしばし煉瓦壁を見入っていた。

目地の通つた美しさ、煉瓦の持つ風合い、落ち着く質感。子供心になぜかいいなーと感じた。

その後、K少年は父にねだつて当時まだ珍しかったレゴブロックを買つてもらつた。とにかく面白くて、色々作つてみた。しばらくはご飯もそちちの……しかし、何か足りない。そうだアーチの迫りブロックがないんだ！

## ●汽車から新世界へ

ある時、東北から単身で来ていた職人のIさんがアパートに遊びに誘つてくれた。日暮里駅のすぐ傍で窓を開けると、直ぐ下にたくさんの線路が見えた。山手、京浜東北、東北、高崎、常磐線に、京成電車が次から次とやつて来るそこは、憧れと興奮の聖地となつていった。

長距離の本線は、その頃まだ大型蒸気機関車が健在で、煙突からもくもく煙と蒸気を吐きながら長い客車を引っ張つて、地響きをたてながら走つていた。ボイラーに親近感を抱いていたK少年は、走り装置を付けたボイラー＝“蒸気機関車”に自然と興味の対象が推移していったことは、言うまでもない。（素朴な疑問→→煉瓦で囲んでないけど.....）

日暮里駅近くの跨線橋は大好きな場所となり、足しげく自転車で通つた。階段を駆け上がり、上り下りの蒸気列車を見つけるとその真上に先回りして、「忍法煙がくれ！」と唱え、伊賀の影丸や赤影になつた気持ちで絶好調。そのうち、機関車の形式を覚え込み、C62、C60、C57...等とメモを取りはじめ、しまいには今日はその何号機だつたと言う始末である。

当然の成り行きで、あの汽車はいったい何処まで走つて行くのだろうか？水と石炭の補給は....等とそれは興味のつきない事となつていった。

小学校3年生の時、船橋の伯母が遊びにきて、帰りに本屋へ連れていつてくれた。「好きな本、1冊かってあげるよ！」と言われたのでK少年は、迷わず「ぼく、時刻表！！！」と叫んだのは有名な話である。

初めて手に入れたその時刻表は、当時最高の宝物となり、学校の勉強のふり



して勉強した?? 記号の意味、数字群、変な矢印、等等なぞなぞ。しかし、誰にも聞かず夜遅くまで暗号文の解析に没頭した。取り敢えず知っている駅名から覚え出した。山手線一周を暗記した。次ぎは常磐線、京浜東北線...とだんだん領地を広げていった。そのうち徐々に記号や数字が解ってきた。うん、これは面白い。先に普通列車が出発するけど、この駅で後からくる特急に抜かれるんだ。上野着の上り列車が、ページを下りにすると、この列車に変わって出発するのか。行き先も変わる!これは上野到着後、回送で尾久の車庫入りだな...云々 今で言えば西川京太郎ばりだ。

そんな仕組みが解って来ると、今度は実際に乗ってみたいくなる。いきなり長距離列車は恐いので、純朴なK少年はとりあえず身近な京成電車に挑戦することにした。当然親には内緒の行動である。初めは隣の駅まで、それでもとても緊張した。一駅ずつ距離を伸ばして、ついには終点の成田まで行ってしまった。急に世界が広がったような不思議な感覚に包まれた。

## ●時刻表から地図そして

K少年は小学校の高学年になり、仲の良い友達を誘っては半日近く秘密裏のうちに電車の乗り継ぎをしたり、尾久や田端の機関区へ電気機関車やたまにくる成田線のC57蒸気機関車を見に行ったりして遊んだ。

相変わらず時刻表は座右の書で、それから連想する未知の地域に憧れを抱き、手に入る様々な地図を集めはじめだした。東京のゴチャゴチャしたのっぺりした地図と違い、地方や山間部の美しさが判るにつれ、未知の土地への思いはますます募った。

そのころ、自転車屋を継いでいる従兄弟にサイクリングを勧められ、半年かけてためた小遣いに父から足し前をしてもらい、4段変速の自転車を手に入れた。まもなく京成電車の貸し切りで干拓前の印旛沼サイクリングに誘われた。とても気持ちが良かったので友達に話すと、みんな今度サイクリングに連れて行ってくれと言う。そこでK少年は茨城県の牛久沼まで片道約50キロの計画を立てた。参加メンバー7名。国道6号線/水戸街道をひたすら走る。途中なんども休憩し、おにぎりやらお菓子やらをたくさん食べた。

6号線のアップダウンは予想以上に小学6年生の子供たちにはきつかった。今では考えられないが、当時まだ車は少なく比較的安心して走れた。帰ってきたら本当にメーターが100キロ指しており、みんな感動した。従兄弟に話し



たら、「おっ、がんばったな」と褒められ、ご褒美に競輪用プロのドロップハンドルをプレゼントされた。(弟が1級競輪選手) これは、羨望の的で長くK少年の自慢のひとつとなった。

## ●鉄道模型の夜明け

中学へ入ると、その頃担当だった炉材屋のTさん(現在常務取締役)がK少年の鉄道好きを知り、来る度知らない事を色々教えてくれた。そして今度会社に遊びにおいでと誘ってくれた。後日図々しくお邪魔をすると、大歓迎され、ケーキに紅茶を出してくれた。帰りにTさんからプレゼントだ。開けてみると、それはなんと欲しかったHOゲージ山手線先頭車のペーパーキットだった。台車はもちろん、パンタグラフやモーターまで入っていた。なかなか手を出せなかった鉄道模型の記念すべきプロログとなった。感謝!

一生懸命作り上げると、うぐいす色に車体を塗った。そうするとやはり線路が欲しくなる。いつもショーウィンドウにたくさん鉄道模型が飾ってある店へ...思いきってドアを開け入った。思ったより優しそうな店主のおじさんだった。(その後長いおつき合いとなる)

折から文化祭が近付いており、先生に山手線電車の展示を相談したらOKとなり、1m位の線路上を何往復もし結構受けた。しかし、どうせなら架線を張ってパンタ集電にしようと仲間とがんばったが、うまく行かずに後半は運休してしまった。うーん残念、架線斬り!

これがきっかけで模型屋へK少年は出入りするようになり、2~3時間平気で時間を潰した。乾電池で走らせていた山手線クハ103もパワーパックのスライドトランスになり、自由形ではあったがカツミ製のED-100電気機関車とカワイ製の17m客車と車両が増えた。そのご尾久車庫でくぎ付けになった特急つばさのキハ82を小遣いためて買った。いつの日かつばさに乗って東北に行くんだと心に言い聞かせて.....

